「よみがえれ夜のまち」

大人たちの社交場である「夜のまち」：九州各県の都市部全てに少なからずとも存在するスポットに目を向け、架空のサラリーマンの物語口調をイントロに、今後の「夜のまち」についての改善策やあり方など活性化策を私なりに描いてみました。

地方中枢都市の片隅、俗に言う「繁華街」のとある居酒屋にて、さびれた店ではあるが、熱い思いを胸に秘めた男たちや情熱的な愛に溺れた事を語る女たちが昔話に花を咲かせている。

「バブルの頃は良かった、派手だった、何でもできるような気がした」…という言葉をよく耳にする。

現在では、デフレ、円安、不況、リストラ、構造改革といった活字や言葉が街中にあふれ、景気の良い話は一部の人間を除いてはあまり聞かない。というより、一般的になって「そんな時代」になってしまって、「そんな時代」をどう生き延びるのかが、個人個人に問われている。サラリーマンだけでなく、個人経営者や学生などこの日本に住む人たち全員に…

この居酒屋の片隅のカウンターにぽつんと１人、地方都市で酒屋を営む家庭に生まれ、都会に憧れを抱いて育ったサラリーマンが飲んでいた。そして将来の事を考えていた。

そのサラリーマンは幼少時代、父の仕事を「遊び感覚」で手伝っていて、普通の一般的な家庭では考えられないが、「夜のまち」が遊び場所だった。
原色系や金銀に輝くネオンの下、お母さんとは一寸違う格好をしたきれいな女性、お父さんみたいに「前掛け」をしておらず、黒いスーツとネクタイをびしっと決めた男性がたくさんいて、その少年も学校の同級生たちとドッチボールや鬼ごっこなどして遊ばず、もっぱら夜のまちの「住人」達と少年特有の「なんで、どうして？」という質問攻撃を投げかけて楽しんでいた。
「お姉さんはどうしてそんなに短いスカートを着ているの？寒いでしょう？」
「お兄さん、こないだのお姉さんはどうしたの？今日は違うお姉さんだね。」
「マスター、棚が空いていますよ。ブランデー１本入れておいても構いませんか？」
こういった、質問攻撃を夜の住人たちに投げかけては、相手の反応を見て、時には「ここは子供が来るところじゃないんだよ。」という、テレビでよく使われるフレーズを返されては、早く大人になって「夜のまち」をもっと知りたいと思いつつ成長していった。

サラリーマンはよく考える、「高度経済成長期」、「バブル景気」の真っ只中に派手な青春時代を過ごし、大学生の頃からやっと「夜のまち」に通う事ができるようになって、就職してからも通い続け、時には痛い目にあいながらも、様々な人達に出会って成長してきたし、これからの「夜のまち」には何が必要なのだろうと。少なくとも「夜のまち」は、学校や会社で学ぶ事できない、人間として一番大切なものを色々と教えてくれる野外教室だと思っている。

そこで今後の「夜のまち」の再整備について一考した。

①「夜のまち」のオープンスペースの確保
家庭内での不満や学校での生活に耐え切れない子供は、「夜のまち」に希望をもってやってくる事が多く、その子供たちのための「オープンスペース」が必要である。「夜のまち」から子供を締め出すのではなく、「夜のまち」の施設や広場を有効活用し招き入れて、そのオープンスペースで楽器を奏でるも良し、ダンスを踊るのも良し、仲良くおしゃべりをするのも良し、ただし最低限の使用上の「ルール」も必要なため、子供たちに集まってもらって、そのルールを作らせて、管理・運営まで任せてみてはどうだろうか。大人がほろ酔いで立ち寄ってみると、無邪気で熱心に一生懸命に踊ったり、楽器を弾いて「自己表現」をしている。そんな子供を見て、大人も何か昔の熱い時代を思い出して、明日への活力につながるかもしれないし、ふとしたアイデアが浮かぶかもしれない。
一例として、東京は新宿のオフィス街、超高層ビルのセットバックした場所、１Ｆのガラス越しに映る自分の姿を見ながら、いつかはメジャーデビューを目指してダンスの練習をしているそうだ。もちろん、暗黙の了解により子供たちが自主的にサラリーマンの勤務時間外に練習しており、他人への配慮のせいか音楽のボリュームは控えめ、親から携帯電話に連絡があれば、きちんと電車で帰

るそうだ。
　現在ではこの場所は、芸能プロダクションのスカウト陣もよく立ち寄り、めでたくメジャーデビューを果した子や、ダンス教室にステップアップする子など、子供たちが都会の盲点ともいえるこのオープンスペースで、自分の道を自分で切り拓いていっている。

②ネオンサインの改善
　「夜のまち」を一層引き立てるのが、派手なネオンサインであり、バブル期にはゴージャスさが求められ、また、現在では店の雰囲気や客層、内容が一概して判るものもあり、その時代や店の象徴となっている。大人はこういう夜の原色系の光やサインに、「ある意味」弱く、そのギラギラしたサインの店がどんな所なのか、子供のように興味津々であり、引き付けられる。
　だが、あまりにも原色系ばかりが混沌として、危険、不衛生といったイメージのある地区もあり、子供に悪影響だとか、地元商店街との統一が取れてないなどといった周辺住民との摩擦が生じている事も事実であり、「夜のまち」のアイデンティティの確立のためネオンサインの改善が必要である。
　ネオンサインの改善は、「夜のまち」の土地利用を明確にすることでもあり、原色系のサインが集中した地区や、暖簾を主とした地区、若者向けの店を主とした地区などが明確になれば、「夜のまち」への訪問者も、目的や要望に沿った店が安心して選択する事ができるようになる。また、「夜のまち」仕様の地区計画や建築協定が確立されれば、意匠の統一や色の制限が設けられるため、歩きやすく、また、安心して店に入ることができ、より一層の「夜のまち」の利用者の増大が見込まれる。
　その他、昼間は壁と同系色になり、夜になるとその店のシンボルとなったりするフレキシブルなネオンサイン自体の工夫や、色彩や光彩の統一による、「夜のまち」のシンボル創出も考えられる。
　「夜のまち」に訪れる人々の目的は多種多様であり、仕事のストレスを晴らしに来る人、出会いを求めてくる人、仲間と楽しくやりたい人などに対して、安心して素敵な夜を提供できるまちの創出のためにも、ネオンサインの改善や適切な誘導が必要である。

③「夜の住人」の意識改革
　上述した①、②による提案は主に、「夜のまち」に対する外的（ハード的）提案であるが、「夜のまち」で生活し、働く「夜の住人」の方々に対する提案も行いたい。
　「夜のまち」は、サラリーマンを主に訪問者にとって、ワクワク、ドキドキする癒しの場、楽しみの場であり、店のオーナーや従業員の方々等の献身的なサービス精神でおもてなしを受けるが、「夜の住人」の方々も、「夜のまち」に対してもっと興味をもって欲しい。同業他社との生き残りを賭けた熾烈な競争もあるが、その前に自分の店の周り、交通量が多い小路に面していたり、段差の大きい歩道に面していたり、気持ちよく酔っていても、お客がつまづいて怪我したり交通事故を起こしたりしたら、楽しい事も皆無になってしまう。
　バリアフリー、ノーマライゼーションといった言葉が、現在のまちづくりには必要不可欠であり、決して昼間のまちに限定しているものでは無い。自分のフィールドを再確認し、「夜の住人」からの提案や意見など、多様にわたる業種間との横のつながりを強化して、話し合いを行って、「夜のまち」を守り、現在の「夜のまち」に必要なもの、改善していくものを提案して欲しい。
　特に最近、「夜のまち」にいる子供たちが問題になっているが、他人の子供だから知らない顔をしないで、遠慮なく声をかけて欲しい。補導など警察だけに任せるのではなく、「夜の住人」がきちんと適切に色々な事を教えて、納得させて、親元に返せば、子供にとっては大きな経験で、学校では学べない事を知ると思う。

　以上、私は「夜のまち」が大好きであり、現在でも足繁く通っているが、最近では元気が無い所ばかりで、私なりの活性化策を考えただけである。これからも、「夜のまち」への来訪者や働く方、のため今後も色々な事を教えてくれる事を「夜のまち」には期待している。